

共同研究「『障害』者と高校教育」は、「ねぞす」11号、「基本的視点と克服すべき課題」（担当・石田所員）で「『障害』者が地域のなかで共に暮らしていくこと」を前提として、今後の課題を整理し、さらにこのテーマについては今後も関心を持ち続け、適宜報告もさせていただくこととお断りしてひとまず終了した。共同研究は終了したが、今後も「障害」者の問題が高校教育の場に投げかけている問題を受け止め、個々のケースや関係資料の紹介、問題点の提起などを積極的に行っていきたいと考えている。

2歳で「自閉症」と診断された明石徹之君。「たとえ普通児の何十倍、何百倍の時間を費やそうと、ひとつひとつ学習しながら地域の中で当たり前で育てていこう」と決心した母親の明石洋子さん。今号では実際に「地域の中で共に」を追求し続け、就労問題まで親子で一つ一つハードルを越えてこられた、障害者地域作業所「あおぞらハウス」事務局長明石洋子さんと徹之君のケースを紹介したいと、寄稿をお願いした。

樋浦敬子

地域に生きて20年

明石 洋子

徹之は二十才。平成4年3月川崎市立川崎高等学校の定時制を無事卒業しました。在学中（4年生の秋）にチャレンジした公務員試験（川崎市現業職員等採用試験）に見事合格し、川崎市より採用通知が来るのを、太陽堂文具店でアルバイトをしながら待ち続け、合格通知より1年半経って、（この原稿の締切日の）7月1日にやっと採用されました。

思えばこの20年いろいろな事がありました。「地域の中で、共に生き、共に学び、共に働き・・・当たり前、人として幸せになって欲しい」と親として願い、そのように育てて参りました。地域の方々のご理解と励ま

しと、さらに、有り難いことに、豊富な働きかけのおかげで、人が好きで、素直で、明るい「ひょうきん徹ちゃん」と言われる、楽しい子に育ってくれて、親としては、障害を持つ子への差別や偏見に対して、悲しみを味わう以上に、優しい思いやりと力強い支えに出会うことができ、苦労に勝る充実感と感動の日々を送ることができ、心より感謝致しております。

ただ幼児期や義務教育期の子育てに比べ、高校受験や就労になりますと、難題続出で、社会の壁は厚いものがあり、親子して落胆することばかりでした。それでも、徹之が「皆

と一緒に高校に行きたい」と何度も訴え、今は「清掃局で働きたいです」と熱心に頼むので、その熱い思いが、親に「頑張ろう」というエネルギーを与え、高校の門戸を開く努力を促し、また障害者地域作業所「あおぞらハウス」を作って、「就労活動をやろう」という気持ちをおこさせてきたのです。

ハプニングを恐れて保護され

管理されたら、社会性は身につかない

思えば、小学校時代から、入学や転入の度に、学校の選択に関してはいろいろ悩みました。特殊・養護・普通のどれを選んでも、今の教育体制では何かを捨てなければなりません。「大切なのは将来自分の意思で生きていく力、自分で稼いで自分の生活を自分で築くすなわち主体的に生きていく力、それが養えるところ」と思いました。就労にあたり、「普通の中で皆と共に生きて、いろいろな勉強をさせて貰えたので、本人が、自分の生き方を自分で決めることが出来た。」とつくづく感じています。

20年間、まわりの方々が徹之のハンディをありのままに認めてくれたので、共に生きる仲間として、差別のない人間関係を広げることができました。本人も多くの人と出会うことによって、社会のルールを覚え、人との接し方も身につき、なにより日々の経験の豊富なことで、環境の変化に適応する力がつきました。鍵を掛けなかったから自転車が無くなり、お金をバックの中に入れてまま体育の授業に行ったから授業料が消えたり、そういう体験のお陰で鍵をかけることやお金の管理もできるようになったのです。問題が起きることを怖がって常に保護され管理されていたら、経験も乏しくなり社会性も身につかせません。どの様な場面でも学校と家庭と十分に話し合い、信頼関係を作り、ハプニングを恐れずいろんなことにチャレンジさせ、失敗の後に成功するという体験を通して自信が付き、

積極的に地域の中に飛びこむ前向きな生き方ができるようになりました。

心が洗われるようなやすらぎと

感動体験を、多くの人と共有して

徹之の20年間のハプニングを書き出せば紙面がいくらあっても足りませんが、そのどれもがトラブルになることも無く、かえってユーモアと感動とやすらぎをまわりの人々に与えてくれました。物が豊かになった現代の多くの方々は、不自由な生活はしていても、心が豊かになれない、充実感が味わえない、それ故、ワクワク・ドキドキし、心が揺さぶられるような感動体験を得たいと願っています。しかし本物の充実感は苦勞して初めて得られるものですし、感動は用意されたものでなく、ハプニングから芽生えるものようです。そういう意味では徹之の20年間は「感動」の連続でした。徹之を授かったことは私達にとって不幸なことではなく充実感が与えられた幸せなのかもしれません。振り返れば人権を無視されたり差別や無理解に対して辛い思いをするほうが数倍多かったのでしょうが、そのような目にあってもその後、その方々も理解者になり強い支えになっていろいろ働きかけて下さり、共に感動することができ、そんな経験が私の心を豊かにさせ、幸せに思えて、地域に生きる勇気が起こってきました。徹之も、地域に生きることで、幸せな体験にたくさん出会えると分かっていますので、たとえ逆境の中においても前向きに生きていけるのだと思います。地域の中に飛び出して多くの人と出会い、人間関係を広げていきました。

高校でも障害者に対する認識と

考え方を変え、人間関係をさらに広げて

高校生活ができたお陰で、さらに人間関係が広がり、人生経験が豊富になりました。例えばアルバイトをしている文具店で人手が足りないときは高校の後輩を紹介し、女生徒と

一緒に楽しく仕事をすることができましたし、自分の「公務員チャレンジ」にもすでに公務員として働いている年上のクラスメートが情報を下さったり、徹之が夏休みに働いた大師公園の清掃にも付き合っ、同僚の方々に徹之との付き合い方をアドバイスして下さいました。徹之の公務員チャレンジに関しては、通知表に「全職員が応援しています。頑張ってください」と書かれ、いろいろアドバイスを下さった先生方だけでなく、クラスメートがこのように心強い味方になってくれました。

その他、山岳部や絵画同好会に誘われ、部員としてあたりまえに受け入れられ、山行にも展覧会にも休まず活発に活動して、皆に仲間として付き合ってもらっていました。嬉しいことに徹之の学年だけでなく、学校中の理解と協力を得、例えば文化祭のバザーの収益金等も各学年から「あおぞら生活ホーム」の設立のために寄付していただくということもあり、福祉にも関心を寄せてくれました。このように徹之が普通の中で生きていくことで、本人もまわりの人も学び合っ人間関係がひろがり、本当の理解と協力が得られるのだとつくづく思いました。この4年間の徹之の存在が、障害者に対する認識や考え方をずいぶん変えたようです。

なぜ地域に生きることにこだわるのか

ありのままの僕を見てほしいから！

昨年「第17回九州山口地区自閉症研究協議会沖縄大会」にシンポジストとして呼ばれ参加してきた時のことです。フロアからの質問に体験談を交えて答えていましたら、ある方から「公務員に合格するくらいならもう自閉症は治ったのですか？」と聞かれました。私は「自閉症という病気は治らないと思ってます。身体障害の方がその器官の損傷が治らないと同じ様に、脳の機能障害というその部位の損傷は治らないと思って現在は育てています。以前は親の育て方が悪いという心因説

が言われ、母親が非難される時期があり、その時はとても辛かったけれど『心因説なら治る』と、とにかく治療法といわれた受容（何事も受け入れる態度）で初めは育てておりました。そのうち原因が心因説から脳の機能障害説に代わってきました。心因説は間違いになり、今後は親は非難されずすみ、ホッとしますが、脳の障害なら治らないということにもなり、複雑な思いです。原因は今後また変わるかもしれません。原因も治療法もはっきりしない現在、『治るかどうかではなくどう自立できるか』を考えることが重要と思います。身体障害者の方の、足の代わりに車椅子があり、目の代わりに点字があると同じ様に、自閉症というハンディを持っていても、本人が社会に自立するために必要な方法を工夫することが大切だと思って育てています。』と答えました。

現代医学では治療法がない以上、どこかに預けて治るといふ事は有り得ませんから、一生生活する場で一つ一つ学習することが大切となります。日々の家庭生活でしつけとして学習したものを、地域の中で応用することによって、自立できるということになります。認知障害がある為、普通児の10倍も100倍も努力が必要かもしれませんが、地域の理解と協力で立派に自立できるのです。特に就労には本人の能力や適性以上にまわりの理解が大切で、まわりが本人を十分知って仕事のやり方を工夫すれば、能率よく仕事もできるようになります。ただ他人まかせだと「できるわけない」と片付けられてしまいます。専門家の中には、「自閉症とは」という学問的知識だけで、「・・・はできない。無理だ。」と決めつけ、病名による先入観が優先して、その人の人間としての個性や良さを見ようとしないこともあり、それで「親自身が学び、他人に任せず、自ら職域を開拓するための活動の場」として地域作業所「あおぞらハウス」を作ったわけです。ありのままの姿を知り一

つ一つの場面でいろいろと工夫しなければ、知的障害者といわれる人達の就労も自立もありえない訳ですから、就労の壁は親の努力だけでは打ち破れませんが、めげずに前向きに生きるしかありません。「勝手に付けられた病名より、ありのままの僕自身を見て欲しい」と徹之はいつも訴え続けていますから。

高校を「受験させてください」

というお願いをしまわって

小学校・中学校は、普通・特殊・養護と選択ができましたが、中学卒業後の進路となると、何故か皆養護学校でした。「地域の中で共に学び・共に育つ」の延長線上は養護学校高等部でなく、高校と思うのですが。でも入試制度を見たとき「この入試を突破するのは難しい」と消極的に避けてしまうというのが先輩たちの現状でした。「障害児には養護学校しかない」というのは残念で、せめて進路の幅を広げたいと願い、そして徹之も普通学級の大好きなクラスメートたちがみな高校に行くので「僕も高校に行きたい」と切実に訴えましたので、大変さは覚悟の上で、チャレンジしたわけです。

しかし高校の壁は厚く「受け皿がありません。本人にとっても高校にとってもマイナスでしかないでしょう。理由は①暴力問題や非行問題が多くて、日々その対応に追われています。障害児がそれこそいじめの対象にならなくなったら問題が大きくなり責任が持たなくなります。②障害児の専門教育を受けた教師がいませんので不安です。必要な教育が保障できません。③障害児の教育のための専門機関として特別にお金をかけたちゃんとした養護学校があるでしょう。そこで教育を受ける方が本人にとって幸せではありませんか。親のエゴや見栄で高校に行かされるのではかわいそうですよ。」と言われ、中には「受験されるのは自由ですが、お引き受けは出来ません。」との返事に悲しさはつのるばかり。断

られる度に徹之は「高校合格します。試験勉強します。」と机に向います。本人が「高校に行きたい」と言うのですから、「本人の幸せ」の場とは、保護された養護学校ではなく、たとえいじめがあっても普通の高校です。受験の機会を与えてくれる事ではないでしょうか。断られる度に、「高校は無理みたい。養護学校にしようか」と伝えましたが、「高校に行きたい。頑張ります。」と言う本人の意志の強さに、親は励まされ、中学の先生始め多くの暖かいお力添で、市立川崎高校の定時制を受験出来ました。

高校合格発表、徹之のそれまでの

人生の中で一番幸せな日

入試は、中学時代にテスト経験（ア・テスト、中間、期末等）を積んだお陰で、学力試験はどうか出来たようですが、面接では試験官2名が首をひねる位の応答ぶり、合否の判定はもめたようです。もめることは予想されましたので、最初から、「短時間の付き合いで一生を左右するような判定はして欲しくない。『専門家がない』とか、『本人の幸せ論』等がでたら、同じ土俵に私たちの意見もあげていただきたい。」と子育ての方針や親の生き方、また専門家でなくても上手に付き合ってくれた小学校の先生方の寄せ書き等を討議資料としてお渡ししていました。きつと一人くらい「僕が受け持とう」とおっしゃる先生がいると信じていました。受験者89名中、合格者82名。その中に徹之も入ることができました。発表の日、貼紙が貼られるやいなや、徹之は受験番号2番の自分の名前をみつけ、貼りだしていらした高校の先生に「ありがとうございます。高校の勉強頑張ります。」と元気にお礼を言いました。それくらい合格するまでの経過を意識しており、嬉しさは最高だったようです。中学の先生が「徹之君ほど川崎高校生になりたかった生徒はいないだろうね。充実した高校生活になる

と思うよ。」と感慨深げにおっしゃられました。私も徹之の合格を喜ぶ姿を見て、苦勞に勝る感動を覚え、充実感に満されました。

第一印象では拒否されるが、その後は

いつも感謝される存在になって入学式の前日、私たち両親が呼ばれ、教頭先生から「合格がすんなり出来たわけではなく反対の先生も多くて、大変もめました。それで、一学期の様子を見て、高校生として学業や生活に無理があるようでしたら退学も考えるという条件で。」と言われ、その時は「4年間もの夜の通学は無理かもしれない。」と思いました。でも徹之の人生は、スタート時にはいつも目の前に厚い壁が立ち塞がっていましたが、その後持ち前の明るさと素直さと頑張りでもわりにこころよい人間関係を作り、むしろその後の人生においても心強い味方を作ります。親が扉を開いた後は徹之の個性に任せようと、この時も思いました。

(厚い壁は現在の就労場面でも同様です。本人がまわりの印象を変えていくでしょう。)

コミュニケーションが不得手な上、新しい場面の認知に時間がかかるので、誰もが「どうぞ」とは言ってくれません。第一印象はマイナス面ばかり強調されるようです。でも長くつきあっていくと今度は普通にはない素晴らしく良いところが見えてくるようです。高校でも先生が「宝物のような感じがします。」と言って下さって、人気者になりました。

思えば、小学校時代から、入学時や転校時には必ず「なぜ養護学校に行かないの。」という質問を先生や父母の方から頂戴しました。その度にそのクラスや学校に存在することを許してもらうための説明が必要でした。「徹之は「かわいそう」と同情され保護隔離される人生より、理解され自立したいと願っていると思います。そのためには、皆様に知っていただかなくてはありのままの姿が分かりません。私達と同じように、地域に生きて、喜

びも悲しみも共有したいのです。」とお話して、クラスの一員であることをお願いしました。まわりの人達にとってもありのままの姿を理解して、ハンディキャップを持つ子と接する経験が視野を広げ、本当の思いやりが芽生え、そしてあたりまえに自然に手を貸してくれる人になります。卒業の寄せ書きには先生や生徒達の、感動が一杯あふれた素敵な言葉が書かれ、徹之の宝物になっています。最初は邪魔者扱いされても、後にはいつもかけがえのない存在になってます。

親よりも充実した青春を送った高校生活

高校でも同様で、4年間で大学ノート19冊に、クラスや職員室、部活動でのいろいろなエピソードや交流が記録されていますが、相変わらずのハプニングの連続です。しかしそれが夜の高校生活の変化に富んだ清涼剤として、先生方も生徒さんも徹之との関わりを楽しんでいたようです。新入生歓迎会ははじめ各行事に徹之はいろいろなパフォーマンスをやって大いに燃え、今までしらけていた学校生活を盛り上げたようです。幾つかの例を連絡帳よりピックアップしてみます。「先生さようなら」といろいろな先生に言う徹之君の声が夜の校内に響き渡っています(挨拶をされなかった先生も生徒もついつられて、笑顔で挨拶をされるようになった)。「回りの生徒たちが今まで経験しなかったのではないかと思われることを経験し、人が成長していつている。学校が良いところになっている。」(他人に対し思いやることがなかった生徒達がやさしく接しており、学校内が暖かい雰囲気になってきた)。「非常にこころよい人間関係が出来ています。これが天性の徳だろうと思った次第です。」「徹之君の回りの誰もが明るくなっていくようです。たぐいまれな個性です。」「集団の中に明るく溶け込んでいます。からかったり差別したりすることなく笑いながらお互いの人格を認めようとする善意の雰

困気を感じます。共に生きることは案外難しくないものです。徹之君が本校に入学して良かったと思います。」等々綴られこの19冊のノートも宝物に加えました。

担任の先生は、「初めのうちはずいぶん大変なことになると覚悟して引き受けましたが、他の生徒が多くの問題を抱えている現状で、相対的に徹之君は安心してみていられます。徹之君の日記を読み返してみると、一行一行明るく人生を肯定的に生きており心打たれます。」と書かれて、他の高校で心配されて断りの文句だった非行やいじめなど恐れることはありませんでした。

学業のほうも大好きな高校を止めさせられたくない一念で、本人の能力を最大限出して勉強しました。小中学校では退学や留年などなかったから自発的に勉強することなんてありませんでしたが、高校はテストをきちんと受けないと入学することも進級することも出来ないことを知り、高校が大好きだから、皆と一緒に進級したいから、向上心も芽生えたようです。大雪の日も大雨の日も夜の高校を一日も休むことなく通って、卒業時には全国

高等学校定通教育振興会賞をいただきました。またクラスメートが昼間働いていることで働くことの意味を知り、現在「徹之は20です。大人です。汗水流して一生懸命、清掃局で働きます。」と張り切っております。あたりまえの社会の中で生きてきたからこそ、こういう意思（自己決定）が生まれたとつくづくありがたいと思っております。

就労に関してはまだまだ社会の壁は厚く、扉を叩く役目は手伝わなくては相手は耳も貸してはくれませんが、どんなに厚く固い壁でも「叩けよ。さらば開かれん。」の心意気でやっています。徹之が4年間の定時制高校にりっぱに通いとげ、素晴らしい体験でおおいに成長した事実が、「かわいそうだから」と保護される道を、選択してこなかった親に、自信と勇気を与えてくれました。今まで励まし、支え、関わって下さった多くの方々に心よりお礼申し上げます。これからもどうか見守ってください。

(あかし・ようこ、障害者地域作業所「あおぞらハウス」事務局長)

現 運営委員長

ねす No.12 1993.10 号

財団法人・神奈川県高等学校教育会館・教育研究所